九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

翻訳　バンジャマン・コンスタン『日記』　(VII)

高藤, 冬武
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5437

出版情報：言語文化論究. 8, pp.231-243, 1997-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

翻訳　バンジャマン・コンスタン『日記』(Ⅶ)

高　藤　冬　武

1804年９月

実月十四日(９月１日)

書簡：タルマ

来信、タルマ夫人。巻五各章の草案作成。目次確定。シモンドに指摘され感心することあり。《道徳の真の基盤》と題うった章を設けると、主題とはかけ離れた明確な結論的なものを期待した読者は最終章の歯切の悪さに引っ掛かり本全体に悪印象を懐くというのである。初めから余分な期待を懐かせぬように、また読者に明確な結論を与えるように心掛けながら、現行の最終章を「鋳直」し、道徳の基盤、利害は勿論のこと、宗教、義務について論ずべき点を加筆のこと。この結論、権力が如何なる口実にせよ宗教に容喙するようなことがあってはならぬ結論であること。《道徳の基盤》という表現用いるべきではないかもしれぬ。《道徳の有用性と危険性について》とした方がよさそうである、深入りも避けられる。

読書、サント-クロワ［秘儀概論］。この種の本、註に本文が中断されること再三にわたる、とても人に読んでもらえるような代物にあらず。だが「秘儀(ミステール)」の項執筆に際し再読の要あり。ミネット［スタール夫人の異称］のここ数日の情け愛敬、いたく感心す。一緒に過す時の歓を再発見したり。±

実月十五日(９月２日)

書簡：ドワドン

巻五の全章口述筆記。原稿の最終部分変更す。発信、ドワドン［コンスタンのパリ近郊の土地レゼルバージュの小作人］。余がドワドンにも父にも全く似ぬということ理解し難し。

夜、セロン姉妹宅。アメリー、見苦しからず。晩餐なかなか愉快なり。

実月十六日(９月３日月曜日)

書簡：ナッソー、フールコー、ルコント

数巻に渉り何章か調整。来信、ナッソー夫人、フールコー、余の七日便に対する返書、ルコント。ルコントに手形336リーヴル振出す要あり。昼餐、アルガン宅。

読書、サント-クロワ。この退屈にして必読の書、読進めるに難儀す。

晩餐、ベルリンのセザール夫人［従弟オーギュスト・デルマンシュのベルリン時代の知己］。シュレーゲルの得意顔、片腹痛し、ベルリンっ子に出会い心はベルリンに在るかのごとし。ミネットの愛想、優しさ変らず。

実月十七日(９月４日)

書簡：ゲクハウゼン

発信、ゲクハウゼン嬢。ラプランシュ訪問［ジュネーヴの牧師、第一共和制政府に入るが執政政府に容れられず公職を去る］。余との交友を切望すること大にして世辞を振撒きとどまるところを知らず。利用はしたし、されどこの男の敵は恐し。この種の思想［共和主義者］の持主

と交わらんか、まさに敵の思う壺、余を強襲せん。

立てるべき章の割振をする。未定は11を数えるのみ。筆耕を傭ってこのかた眼は回復するも、仕事は進行に遅を来しもはや仕事の体をなすとは言えず。

ドルゴルゥキ王女［パリにサロンを開き有名を馳せた、レカミェ夫人常連の一人］。コサックとシルケシア［チェルケス族］の扱雑（ないまぜ）、なかなか快し。物腰の悠揚迫らぬ雰囲気、豊な話談。その話談の魅力にさらなる妙を添えたるは、身分、習慣（てぶり）、自信の為せる技と言うべし。

ネッケル氏が青春時代に書き遺せし喜劇何篇かを読む。冗漫、誇張、青臭、目につくも鋭い洞見多し。田舎者を軽蔑しきったパリ人を登場させ一人の田舎者に騙される様を描くという意図、面白く痛快なり。作品に共通する基本構図、新鮮にして鋭し。君主ソリマン、三人の妃ありながら性格に惚れてロクスラーヌを迎えるが、結婚後ロクスラーヌその性格を「発展」させ、ためにその性格があだとなり、夫を不幸のどん底に陥れる妻の姿というもの正に喜劇の発想なり。

ミネットの愛想やや減じたり。余は今の生活に倦み疲れたり、いや今に限らずいかなる生活も然あるべし。然らば、試みに新しき生活を験すべし。余には失うもの無し。

実月十八日(９月５日)

いったんばらした章を割振る。草稿をなすべき章まだ9章を数う。〈メルキュール誌〉に載ったヴィレール批判を読む［仏学士院賞を受けたヴィレールのルッターの宗教改革の精神と影響に対する激しい批判、Ch.D.の署名で２回連載された］。「彼の連中」のヴィレール攻撃の激しさ、如何なればかかる激しさか理解し難し。連中の最初の反駁の勢い今とよほど違っていたのが途中から過激になったは何か知られざる事情あってのことであろう。とにかく、連中、勢力伸張の機と踏んで攻勢に転じ、「専制と迷信」を説教するが、そこにはもはや意図を隠し主張を抑えるしおらしさは見当らぬ。本心を偽り人を騙さなければならなかった時代はもはや過去のことと見做してのことである。問題は、我々が４世紀逆戻りするかどうかにある。何故なら、この逆行は、それによって利するところの者から金を取ろうと目論見んだ卑劣陋賤の族が仕掛けた逆行だからである。新教に対する激しい攻撃によって問題がすり替えられるのではないか、余が些かの心痛なり。新教か旧教か、選択の問題と勘違いしそうだが、実は新教も旧教も脱捨ててさっぱりしたというのが我々の正直な気持ではなかったか。人生万事、能く攻勢に転ず、これ一つの大なる得点なり。守勢が和議に応ずるは常のことなり。一切の宗教がフランスの為政者により御法度となった時、宗教家は信者の迫害を望まぬ者はいずれも味方とみなしたものであった。余の本も、世が世なら、連中に有り難く歓迎されたはずなり。今日、宗教に独占的支配を認めぬ者いずれも反宗教的人物とみなされん、されば今できることのすべては、その「自由の原則」を包隠してでもとにかく新教を護ることである。ところで、以上に鑑み言えることは、余の著書の刊行は時節を待つ、待つからにはじっくり構えてより立派な原稿に仕上げるべし。レディーメアリ-ウォートリ・モンターギュ［英の女流書簡文作家1689～1762。機知と皮肉と常識に富んだ書簡を残す。〈メルキュール誌〉1804年９月号にフィエヴェの書評載る。］とビオンデッタ［スタール夫人の異称］の不思議な合致。卑劣漢フィエヴェの筆とはいえ、その書評なかなか良し。

再び余の計画なるものに戻る：解決すべき問題、レゼルバージュの家政、金銭、情婦、旅行。

実月十九日(９月６日木曜日)

草案練直す。道徳と宗教の関係は古代民族に限定し論考のこと決定す。有神論（ティスム）［唯一の人

格神がこの世界を創造し支配(＝道徳律)するとの立場］の部、余の思い通りに論ずること不可能なればなり。信心家はいうに及ばず、時勢に身をすり寄せ、「哲学は宗教を排毀するものに非ず」との論を張って言い含めんとするあの思想家連中の大部分を敵にまわすことになろう。信心家を攻撃してくれるのでこの連中の力は見逃せぬが、こちらが不用意にその攻撃に加担しかえって連中のその場限りの言葉の嘘を暴き敵を利するようなことになれば、こちらに向けるその怒りたるや凄じいものである。従って、『古代民族における宗教と道徳の関係』との題で一本にまとめるべし。だがそこに筆者の見解：「宗教的情熱を駆立てる力は多神教よりも有神論［一神論］がはるかに勝ること、しかし多神教にもこの情熱の力あれば筆者として論ぜざるを得ず、多神教から有神論に入ったと筆者が考える例を理解の助として二、三挙げたこと」を述べるのは支障あるまい。原稿巻三口述筆記。知事と昼餐。読書、サント-クロワ。著者は、「有神論思想はいかなる点においても秘儀に通ずることはまったくなかった」と否定する。だがその否定の立証なし。それはともかく、興味深き見解散見す。

晩餐、味気なし。疲労困憊す。他人を不幸に陥れず休息平安の内に暮す、なぜ余には叶わぬことなのか。

実月二十日(９月７日)

書簡：ドワドン

ドワドンより余の熱月二十三日便に対する返書。余が在所［レゼルバージュ］の出費恐しき額となれり。立直の要あり。ローマ宗教における「宗教と道徳の一致」の章口述筆記。思ったより良き出来栄と見えたり。だが、筆の運び何やら誇張めき余が普段の手風(てぶり)逸脱の感あり。しかし、これを中核に据え後から論述を加え肉付ていくこと可なり。ベルモント王女と晩餐、なかなか愉快なり。ビオンデッタと話す。徐々に兆してついに嵐とはなりぬ。余の思遣のなさ頼り甲斐のなさ、余の感情と行為の乖離等々をめぐり凄じき喧嘩午前三時に至りぬ。嗚呼、望むらくは、現実の不幸はさておき、老という自然の一般法則を嘆く千編一律の哀歌は避けて通りたし。望むらくは若さに見捨てられし女の繰言を男として聞かずにすませたし。関係を続けて10年、二人とも四十の坂に近づき、ここ10年来《もはや我は愛を持合せぬ身》と口の酸っぱくなるほど言明してきた今 ── この言明を翻せしは、相手が苦痛と激昂に身を強ばらせ、もしや物の怪の仕業にやあらんと恐しさに身が竦み「ひきつけ」を鎮めんとした時を除き後にも先にもなし ── 望むらくは愛は強要されずにありたし。最後にもう一つ、望むらくは、行為に感情が伴わぬと言うのであれば、どうせ有難がるわけでもなし、余にその行為は求めぬことなり。さて、かくのごとく言うべき事を言ってしまえば闘志は失せぬ。よって待つべし。余はビオンデッタを愛す。胸潰の悲しみにまかせてかくは綴れど、相手の美点長所一つとして余の琴線に触れぬはなく、哀れ不憫と思う気持に変りはないのである。さは言えど、為すべきは自殺、さもなくば、最初の機会を捉え最も痛み少くして彼の女から余の生を切離すべし。地上から姿を消すか、友人として留まるかの二者択一。

実月二十一日(９月８日)

ローマ宗教の章了。嬉しさ一入なり。一日のうち落着いた時間が持てるのはせいぜい午前の５時間のみ、それが終るや肉体の苦痛と心の憂苦が始るのである。灯火の仕事は無理［視力の衰］。晩餐後の会話、今や思っただけでもまさに苦患の種そのものとなってしまった。「性欲処理」の手段を持たぬ身で妄想に振回され健康が害われる、この妄想というやつ、憂愁と肉欲の二つ巴、日毎に募り例えば今宵は狂気の様相を呈するに至れり。要する

に、余の全身全霊、尋常ならざる震蕩にさらされているのである。捨ててミネットを悲嘆させる、留まって人生の残りを消耗させる、悩み二分されたり。ミネットの将来を思えば不安に駆られる。ミネットがフランスで平穏に暮す、その機会たるや恐らく微々たるものである。二人は、残された歳月、気根の尽きるまで落魄の流浪を重ねるのがおちであろう。捨てたとしても捨てきれぬはその影、徒にさんざん苦しめたあげくの果、相手の許に舞戻るはず。この情況から脱出するには、「結婚」という後戻のできぬ行動がある。だが、妻といっても生身の人間であるからにはいずれ新たな敵となる、戦闘に気づいた時は後の祭、もはや元に戻れぬ一線を越えてしまっているのである。これぞ痛恨嗟嘆の一巻とや成るべし。

実月二十二日(9月9日)

寓意の章にかかる。この章、論点充溢、草稿上がる、出来は中の上。問題は多神教の「逸脱」に関する巻である。当地滞在中の完成は危ぶまれる。余が自家薬籠中の物とするギリシャ、ローマに限ってはとの思い一再ならずあり。だが、限定すれば論考の「空隙」たるや目も当てられぬものになり、しかもせっかくのこれまでの準備が悔まれる。それはともかく、余の仕事わるくはなしとの自信生じつつあり。気力体力乱れがちなればこの進捗喜ぶべし。身に何事の兆しかは解らぬが、衰弱、無気力募るばかりなり。今冬の旅、独居(ひとりい)、我が身の良薬とはなるべし。

夜、セロン姉妹宅。アメリーなかなかの愛敬。三十二歳というのが何とも残念なり！運命の我に背かざること絶えてなし。その気になって妻とすることもできたはずの女が余の意にそぐわぬ点を備えていたこと常に変らぬ例なり。ハルデンベルク夫人［コンスタンの二番目の妻となるシャルロット］、退屈な夢想家。リンゼー夫人、四十の歳に加えて二人の私生児。ビオンデッタ、誰よりも余の意に適うはずの女だが、余にはもはや愛する気なし、相手は友情に限定したくなしと言う。さて、このアメリー、かなりの財産家、余との結婚を待望み、世評はともかく、二十歳であれば充分「矯正」は可能なれど、三十二にして姿色と礼を欠き、欠けぬは歳を重ねて根を張った愚言愚行なり。アントワネット、二十歳にして愚言愚行なく財産有り、容貌作法人並なれど、フランス女性に非ず。かくなる事情の中を生きて人は往く。往きて果てなば事情は振出に戻る。今あげた女の中から撰ばざるを得ぬとしたら、それでもアメリーを採る、移住が手軽で縁者少き女なればなり。

実月二十三日(9月10日月曜日)

書簡：ナッソー

発信、ナッソー夫人。「多神教における道徳の僧侶職に及ぼしたる影響」の章、口述筆記。必要な論述すべて展開したわけではないが既に実に面白き章とはなれり。巻四「情況論」の草案をなす。この巻は分析的方法やや抑えるべし。分析的方法は両刃の剣にして、密度の高い論述の場合すぐれて役に立つが、疎にせざるを得ぬ場合は弊害がある。

晩餐後シモンドと話す。真面目な話をまったくしないといって非難される。仰せの通りだが、余が人と物とに寄せる関心の薄さ余りに薄く、見ても聞いても緘黙か諧謔(おどけ)冗談、これ以外の気分にはなれぬのである。他人の助力なくして達成できぬ目的断念してよりこのかた人にものを説く心もはや持たぬ身なり。しかし、興に乗じて戯れ気散じする心あり、しかも余が諧謔冗談常に功を奏すれば利用するなり。天が我に与え給いし得意の持前、己を相手の冗談戯言(ざれごと)なり。

ミネット優し、余が気分良し。肉の快あれば気分晴れるは常のことなり。±。

実月二十四日(９月11日)

書簡：タルマ、フールコー

発信、タルマ夫人、フールコー。来信、父、余の三日便に対する返書。

巻三第Ⅴ章了。シモンドと散歩、その前に「序論」を読み聞かせれば大いに感心す。実に正しき思想と実に純粋なる意思の持主なれば、この男、無才ならずとも、その才の少なきこと残念なり。シモンド、社交界入りを許された嬉しさにうつつを抜かし、許されたは能力あればのことに思いがいかず仕事怠り、最初の微々たる成功の喜びに以後の立功の手段を犠牲にしたり。実はこの男、仕事はやっているのだが、やってる主題が曖昧で本人も委細は分らぬのである。昨日学んで今日それを書く、これでは自分の専門を極めること決してできぬ寸法なり。とにかく、当人は学問をしたつもりで得意がっているのである。かくなること常に嘆かわし。

読書、サント-クロワ。「秘儀(ミステール)」とは人類の頭の中に浮んだありとあらゆる思想が納っている倉庫であると見なすべき理由日毎に強まる。そこはすべての思想が互いに相容れずに出会って納められていた場で、そこで、どんな思想も昔はこの中にあったという事実の立証は材料に事欠かず、またこうして立証された思想が互いに相容れずにあったという事実の証拠についても同様である。

ビオンデッタ相手に平穏な宵の一刻。

実月二十五日(９月12日)

書簡：ナッソー

来信、ナッソー夫人。巻三第Ⅲ章、口述筆記。二人のイタリア人、アッチェレンザ兄弟と昼餐、食後、三人目のイタリア人、ベルモンテ皇子［1779年３人はナポリ共和国を倒した反革命の敵としてナポリを追われた］と会見。このイタリア人いずれもパンタローネ［イタリア喜劇の道化役］に通ずるものあり、才の閃き見せることあっても尊敬の念を懐かせること決してなし。プロイセン国王［フリードリッヒ・ヴィルヘルム３世、優柔不断の評あり］の性格についてのベルモンテ皇子の観察、正鵠を得たり：この王の国務を執るや一吏員の職務を執るに似たり、仕事に個人的喜を見出さんとの気持いささかもなし。これプロイセン国王に対する最も優れた讃辞との自覚、当のベルモンテになし。スウェーデン王［グスタフ４世、在位1792～1809。ナポレオンとの戦争に対する優柔不断が禍し幽閉廃位］をめぐる面白き仔細［不詳］あり。この仔細から窺えるのは、誠実な心、傲慢と犯罪を真に憎む態度なのだが、アッチェレンザ公、更にこの仔細に付け加え、「王は尊敬されるに足る力を欠き、愚王なればあのような事を引受けるのだ」と述べて本人は王を愚弄したつもりなり。人間が人の弱さを侮る！幸いなるかな、人間を軽蔑するの手段、弱さが持つこと。シュレーゲルの滑稽な言葉、物書きとしてのシュレーゲルの自尊心の典型なり。友人［おそらくノヴァリス、1801年没］に献じられた書簡詩(エピートル)に目を通していたところ、「この友やがて亡くなりぬ」との註に出くわしそれをシュレーゲルに尋ねれば、答えて曰く、《さよう、ちょうどその頃二十七の歳で亡くなった。だが、よく間に合い余の書簡詩を受取って死んでいったものさ》。この友の生きる目的がとりわけシュレーゲルの書簡詩を読むことにあり、それを読みおえさぞや満足であったはず、ということになるではないか。

ミネット相手に宵の一刻、平穏、実に平穏なり。日に異(け)に美(うま)し宵とはなりぬ。

備忘記：見れば〈デバ新報〉に小逸話あり、余の「賤婦を囲わんとの目論見」につき考えさせられることあり。恭順品行、間違なしと想像していたのだが。現実の話たるや！思うにこの計画諦めるべし。

実月二十六日(９月13日)

巻三第Ⅶ章整理し口述筆記。要再考。出発までにこの章の原稿浄書と気は急くのだが、

いまだ一向に論述完成を見ぬ次第なり。各部を一つ一つきちんと仕上げておけば為すべき仕事の量これほどのこととも思えぬのだが、如何せん、我が怠惰のしからしむるところなり。常に論述を先送しとりあえず論点は見出のみを記して良しとするのである。この遣方の不利は構成に「綻び」を来すことだが、論点の相互関係は把握しやすいという利点もある。〈メルキュール誌〉［1804年9月8日号］。ミラボー攻撃。連中［メルキュール誌の編集者］を偽善者呼ばわりしてもはじまらぬこと。連中が目の敵とするのは他ならぬ自由なのである。およそ「自由」に好意的な思想にして連中の攻撃中傷を逃れざれるは一つとしてなし。ところで、彼方（かなた）、コロー・デルボワ［公安委員会で辣腕をふるう］のかつての秘書にして弁護者、此方（こなた）、ブレストの独裁官の手下、或は、自らも端くれとして「記者（ジュルナリスト）の祖国」と仰いだ英国に潜入、暴動を煽り暴徒買収未遂の廉で国外追放となった間諜［フィエヴェ、仏の作家政論記者、メルキュール誌主幹、ナポレオンの命を受けスパイとして英に入る］といった類の、正面（まともな）な意見も持たぬ徒党を相手にしたところでどうなるというものでもなし。

晩餐、ベルモンテ皇子と。相変らずの饒舌多嘴、だが頭にはなかなか刺激的なり。皇子の話の面白さ、いずれも均一にして単調なれば、ついには人を倦まさずにはおかぬなり。盛大なる夜会。クールランド公爵夫人［タレイランの《アミ》］。夜会のはしご、ビュティーニ夫人［夫はコンスタンの医者］宅。相愛を見せつけられたり。社交にかくも長時間身をさらせば心身潰えたり。およそ才ある者いずれにとってもまさに窒息地獄（エトウフワール）なり！心中に不機嫌の大発作走れり。

実月二十七日（9月14日金曜日）

第Ⅶ章了。心身の不調か主題の難か、第Ⅷ章執筆不能。主題の論述方法、「物語的」形式と「学問的」形式の混合にしたれば、両者の「不便」避け難し。叙述に徹すれば余さず詳細に及ぶこと可能で「空隙」一切生ずることなし。学術に徹すれば流れの前後は触れずに事象を切離し引証することができる。余が採った方式では充分に完全な叙述は許されず、しかも一連の叙述を強いられるので結局どちらつかずの不完全なものとなる。奮起して草案練直すべし。変更といっても大した変更にはなるまい。それに、すべて遣直すとしても「投出す」か「全うす」のどちらかではないか。この著作を貫く基本、かくあるべし：主張、次に裏付の事実、次に例外、次に例外の理由、次に再び裏付の事実、最後に、余の〈宗教の根源〉説を裏付けるところの「まとまって一体をなす証拠」を提示するためにしかじかの宗教の一覧。以上はシモンドに余の原稿を朗読してもらった時の印象に教えられ考えたものである。そこで分かったのは、叙述を避け事実の確証と「写生」を続ける限り受ける印象は満足すべきものだったが、叙述に入るや疑義異論の箇所が出てくることであった。だが錯覚は禁物。古代文明について余が博識家の域に達すること不可能なり。博識と称されるには「思索」に必要な時間を犠牲に供さねばなるまい。されば余が手懸けるべきは唯の「博識の書」には非ず。

実月二十八日（9月15日土曜日）

午前中一杯仕事、草案手直す。来客、ピクテ教授。教授の「森羅万象（ユニヴェルサリテ）に渉る知識」、不都合あり：物理学に非ざれば如何なる事象も教授をして特に感奮せしむることなし。何事もその意見活発なれども常套陳腐なり。教授を相手に宗教と道徳の話をしてみんとしてすれば、可哀相に相手はその場しのぎの「語呂合」をなすにいたれり。

ベルモンテ皇子を訪問す。これほどの疲を知らぬ饒舌家未だ曾て見たことなし。ジュネーヴに住まうジュネーヴっ子、つまりジュネーヴを馳せ廻るヴォルテールの逸話なら何でも

知っていて当り前の余を相手に、或るジュネーヴっ子から朝仕入れたヴォルテールの話の一部始終を語ったものであった［ヴォルテール、1755年ジュネーヴ郊外に住み、60年宗教的発言等で市当局と容れず国境に近いフランス領フェルネーに移り1778年没］。

大昼餐会、知事宅。この男の、自分が嫌う相手［ナポレオン］に不満を抱く者に寄せる友愛日毎に情を増して濃やかなり。セシュロン［ジュネーヴ北1キロ、旅亭で有名］。哀れ不幸なエインスリー［英の旅行作家、14日セシュロンの旅亭で頓死、宗教的葬儀を拒否されたらしい］の埋葬。冷酷無情！手本とすべき立派な請願！ロール着、叔母宅、冷ややか気詰りの晩餐。

実月二十九日(9月16日)

書簡：ドワドン、父

草案手直す。最も手堅きまとめと言えよう。余の立場、歴史的形式にやや近づく。よくよく考えれば、すべてを「公理」として論ずること不可能との結論に達す。「宗教の根源」から始めて自然発生的な宗教感情の歩みを論じ、最後に、各宗教とこの「根源」及び「歩み」を突合せながら、各宗教が分離していった理由と原因を検討する。

昼餐、叔母宅。食後、心情開陳。叔母の気持は、「余がビオンデッタと結婚する、さもなくば別れる」にある。叔母の言う通りなり。ビオンデッタとの結婚、余が望と叔母はふんでいるようだがこちらにはその気持毫もなし、この点に叔母の誤解あり。この事実、叔母に明かすことは余の「計画」［8月5日参照］の《信仰告白》にも等しき告白であり、イタリア出発［スタール夫人のイタリア旅行］までこのまま続けんとする今の生活とこの計画が余りにも相違すれば、言葉を濁すにとどめたり。叔母、ビオンデッタの話題の後、それとなくアントワネットを持出し、持参金5万スイスフラン、すぐにも入ると匂わせたり。アントワネットと一緒になるに支障なきこと、余にはかなり似合のはなしであること異存なし。第一に生活の転換となるであろう。小事は言うに及ばず大事においても余は自らが「主」の立場を取戻せる、何故ならば我が心あまりに磨潰されたればもう懲り懲りである、如何なる女といえども、ビオンデッタの前例はあくまでも例外なり、試みてみよ、我を尻に敷くことできぬはずなり。仕事の捗り比べようもあるまい。意あらば周囲に交わり、意なくばフランス、ドイツに交わらん。今の曖昧な身の上から解放されるべし。アントワネットすこぶる美人とは言えぬが未だ齢(よわい)二十(はたち)歳、暫らくは肉の快を愉しむに相手として不足はなし。淑やかで明るさもまあまあ、才走ったところもない。今よりも良い女になる可能性あり。ビオンデッタの知るところとなる前に結婚を執り行なっても構わぬといって娘をくれるなら妻とする。そうと決まれば二月後、亭主の座におさまっているかも知れぬということだ。たとえ面白からぬことがあろうとも、ビオンデッタ相手では得られぬ生甲斐、《旅と学問》の二つあり。余に旅心生ぜんか、ビオンデッタならつきまとう。余が机に向わんか、邪魔をする。もちろん、物には裏がある。家柄に不足あろうが、「戸主」におさまるわけである。金に恵まれぬかもしれぬが、自由独立に恵まれる。とにかく一月半後はっきりするであろう。発信：ドワドン、父。

実月三十日(9月17日)

新草案に従い巻二下書をなす。新草案文句なく最良。余のこれまでの遣方には或る一般原理を論ずるにただ一つの民族の特殊な例を挙げて済すというきらいがあったが、新草案によれば、歴史の詳細事例あますところなく記すことが出来るので、この点改良されたり。これより4巻からなる第一部の仕上にかかるが、他の部にさきがけて刊行できぬかどうか今のところ何とも言えぬ。刊行の有無は万千の個人的事情次第なり。

アントワネットをめぐる余の計画熟考。問題なきにあらず。計画をビオンデッタに告白せんか、その号叫喧喚満天下に響き渡らん。実行後明かされるまで伏せておかんか、己が裏切者に見えて自己嫌悪に陥らん。アントワネットとの結論を出す前になすべきは、或る機会を設けビオンデッタに結婚についての態度決定を迫ることである。だが、これとて容易なことではなし。相手の狙は明確なり：余を愛しているので手放したくない、さりとて余と結婚する気はない、結婚せざるを得ぬとなればはなしは別だが、二人の関係解消がひとえに余の決断に懸っている限りその破目に陥ることは絶対にないとふんでいる。という訳で、余の論法は「循環論法」となるのである。ところで相手のこの狙、世の何人も知らぬところのものである。現実に世間が余に見てとる姿たるや、己の欲することが言出しかねる弱い男、さもなくば、都合が良さそうなので現状に執着し実を取って名を捨てた男の姿である。別の女と結婚すればしたで、算盤をはじき10年を越える関係を計算ずくで解消した男の姿を見てとるであろう。

原稿の一部シモンドに読んで聞かす。「大地」に足を下すや、つまり「事実」の土俵に上るや間然するところなし。読書、サント-クロワ。引継と更新を繰返してきた「秘儀」と、キリスト教が入り多神教が脅かされるに到った時期に創られた「新秘儀」、余が予て考えていたことである。

補足日一日(９月18日)

[共和暦は１月を30日とし１年12月で360日、残る５日を補足日(＝サンキュロットの日)とした]

草案、更に何箇所か手直す。多神教が完全な「転落」に至るまでの「自然な歩み」を辿る要あり。途中で多神教の「逸脱」を持出すと論述が中断され歴史の流れと関心が絶たれ続かなくなる。従って、二つの部分―― 一は、多神教の「自然な歩み」、二は、情況と気候風土の影響による「逸脱」―― に分けた方が無難ではないか。第一部では詳細を余さず、多神教の「自然な歩み」に歩を合せることになる他民族についても例外とせず、導入すべし。宗教的情熱の分析を「序論」の部に導入できぬかどうかも検討の余地あり。

散歩、騎馬行。ファーヴル［スタール夫人研究の生字引となるギヨーム･ファーヴル］訪問。地図の山に埋れ居たり。地理に非ざれば何事も浅見短慮、その裏に潜む奇妙な好尚、そしてこの好尚あれば究め得た深奥なる知識、だがこの知識、氏の専門外の話題意見と奇妙な対照を見せたり。土。

読書、サント-クロワ。夜、トランブレィ夫人［不詳］宅。

ビオンデッタと晩餐、穏便なる小競合。千思百考の末、ついに執るべき行動を見つけ出せばそれに従うべし。予告なしにビオンデッタを捨て裏切の卑劣漢と見られたくはなし。世間の不評を買うと言って結婚に反対するのであれば、不評の是非はさて措き、結婚を強いるわけにはいかぬ。だが、イタリアから帰国直後の秘密結婚を申込むこと、金銭問題の整理(整理がつけば金銭については夫人の支配から自由になれる)を持掛けることはできるはずなり。この提案に唱えるべき異議は一つとして見出せまい。相手が蹴れば、こちらは自由の身となり、しかも非難はうけず、余の手紙を見せれば世間は味方に出来る。手紙の中でビオンデッタとの金銭関係は説明できるわけで、説明すれば実に簡単なことであることが分かってくれよう。これで話は決まり。

補足日二日(９月19日水曜日)

序から終章まで草案脱稿。最後の数章空白のままだったのが、今日の唯一回の下書で立論、どうにか埋めることできたり。この点、他の草案脱稿に要する時間に関し心の余裕できたり。こつこつと続けて行く仕事の上で常に支障となる眼の問題なければ今冬で執筆了

となるはずなのだが。

本日九月十九日なり。ビオンデッタと初めて出会い余が運命を決定させられてから10年が立つ。この日を境に、爾来、余が人生の立直にビオンデッタが立ちはだからぬ日の一日として無し。ビオンデッタの為せる業、楽よりも苦の勝らぬ日の一日として無きこと忘るべからず。嗚呼、多事多難のこの10年！嗚呼、予想が吉と出ながらどれだけの期待が外れて凶となったか、確とこの目で見てきたり！名声のなにがしか獲得せしも余の実力からすれば不足あり、余の徳からすれば過ぎたる名声なり。社会的義務を果しかくて齢三十七に達したるも、大厄難なしとはいえ、身の上定まらず将来の設計に確としたものなし。アントワネットの件、決断の迷い窮れり。この件、ビオンデッタの支配からの解放、己の評判を危うくする情況からの脱出が懸っていること、それはそうだが、パリ生活の可能性を永遠に失うことでもある。この問題、偶然がまた決定してくれよう。偶然に委ねるべし。

補足日三日(９月20日)

犬のムール狂犬病なし。今日で40日終れり［検疫期間。８月11日他犬に嚙まれる］。この〈恋人(プチタミ)〉を失わずに済んだこと安堵す。入手いらい手古ずったことなし。ウルムから２、３町行った所で求めてよりやがて半年になる。

新草案の第Ⅰ章口述(カースト)筆記。古代エジプトと現代インドの特権階級に関する抜書をまとめる。シモンドと原稿朗読を続ける。完成は遥か先のことなり。この朗読、余に有益なり、他人によって、しかも読方の下手な者によって読まれるや、原稿の長所短所ともに増幅されて響き、また、評価を下すに必要な知識は持合せぬシモンドなれど余の不注意や手抜による「空隙」を見つけてくれることがあるからである。エジプトギリシャ間、エトルリアローマ間の「空隙」がはっきり分かったのもこのような事情による。

知事主催によるクールランド公爵夫人歓迎の夜会、余興に湖上の音楽あり。余がこの夜会逸したこと幸いしたり。陸にあって一行を待てば、余には脅威の的であったこの宴会より皆戻り来たる。

我がアルベルチーヌ、可愛い子なり。余の才気を一身に受け、これに勝る才気未だ曾て見たことなく、これ余には大いなる自慢の種なり。ミネット優しく愛想あり。

補足日四日(９月21日)

書簡：タルマ

巻一第Ⅱ、Ⅲ章整理。古代エジプトに関する第二の抜書をまとめる。来信、タルマ夫人、余の実月二十四日便に対する返書。リエ夫人宅へ行く。貞淑ぶったジュネーヴ婦人二人あり。大夜会、ミネット宅。アメリー。老嬢、冷笑、痩姿、真に惜しむべし。アメリー10歳若ければ、余がアントワネットを措いてアメリーを取ること論をまたず。アメリーの欠点、いずれも若年来の孤立の生活に根ざすものなり。誰からも相手にされず皆の嘲笑の的となるばかりであった。そこで自分の言うことを人が笑うのを見て、人を笑わせるなら何を言っても良しと思込みそれが習い性となってしまったのである。出会が10年早ければ「魅力ある女」に仕立たのだが。10年前といっても、そう言う我は今ある我のままということだ。10年前の我には「女を仕立る」腕はまったく無かった。特にあの顔、余の趣味に非ず。姿色を欠く。恐しき腕。処置なし。アントワネット、美人に非ず、その相貌にいたってはアメリーより快しとは言い難いが、少なくとも女の姿色は備えたり。こちらの方が暮し易い女とも思う。我いささか酩酊、過ぎし日の心晴の気分おおいに取戻したるも、それで未来が開けるでもなし。ビオンデッタの出発まで何事も決しかねれば、それまでは仕事に精進あるべし。禍を転じて福となすの譬あり。

補足日五日(9月22日)

巻一の最後の5章調整。草案の進展申し分なし。マイナースの「エジプト論」抜書もう一つまとめ口述筆記。推敲は明朝の仕事とする。

昼餐、アルガン宅。読書、サントークロワ、早目に帰宅、あらためて我が身の上の情況を思量再考す。情況の分析:

①ビオンデッタ充分に優し。別れずに余が流儀で暮すとの堅い決意を見せれば相手は従いてくるものと思う。

②ビオンデッタとの暮しはあらゆる点において暮し易し。

③ビオンデッタに隠して結婚すれば最も不実な男と見なされよう。

④かなりの金持と結婚したとしても不如意は今よりもはるかにひどくなるであろう。

⑤結婚しても一緒にパリで暮せぬ恐れあり、仮に望んでパリでの一人暮しを始めれば非は我にあるが、世間はそういう余を大目には見てくれまい。

⑥自分の性格の弱さを時に甘く見ることがあるが、その弱さ故にせっかくの決意も腰抜となり家族に支配され腕ずくで捩伏せられる恐れあり。

⑦最後に、余の心不安定で倦み易すければ、妻とした女の顔に興醒、相手が齢十九にして容色鮮姿を欠くアントワネットならなおさらのこと、あげくの果が「漁色」ということになれば元の木阿弥ではないか、今ならば「悪所通い」も大目に見られようが、結婚をかなり重んじるこの国[スイス]の厳しさに触れればそうはいくまい。

⑧パリ滞在を更に難しくさせることで、或は外国人女性[スイス人]を娶ることで出世の障害をもう一つ重ねる、こうなった時の臍を嚙む鹹苦たるや計り知る能わず。

以上の結論、「結婚はせざるを以て良しとす」。余が生の惑乱の種— 女体が欠かせぬ《房事の嗜癖》— とビオンデッタとの精神的関係、この両者の調整という問題が残る。遊蕩仲間がまわしてくれる情けなくもさもしい「方便」には倦み疲れたり。今この点につきなかなか合理的な案いくつか浮んだり。熟思のこと。

葡萄月朔日(9月23日日曜日)

ビオンデッタが、友人知己の中でも睨みがきかず良心に反することを言わせることが出来なかった者たちすべての忠告と余の懇願を無視してパリに入ってから今日で一年になる。結果は惨めなものであった。余が在所を離れずビオンデッタに同行せずに済ませることができたならば、財産の一部、人生の数年を与えても惜しくはなかったであろう。だが、相手は不幸に苦しむ女、余は大人しく不幸の威力に屈したのである。その父の死に対しても同様であった。余がついに堪え難き情況から脱出せんとの意志を示せば、元のように相手から少しは嫌われずにすむであろうか。おそらく答は否である。こちらの言い分苦情、眼の労もあったものか、一時まで引留められ心身おおいに狂わされたばかりである。余が性格の見苦しきまでに弱きこと事実なり。相手に構わずこちらが出て行く、これに何の不都合があるというのか。相手が立腹して憤懣をぶちまけるとなれば事態は破局を迎える。或は相手が大人しく従いてくるとなれば余の奴隷状態緩和される。かくも容易な方策に手を出しかねているその訳は、いずれすべてが終るという期待があるからである。気のおくれ、躊躇がありながらも、ビオンデッタ留守の間、辿り着く岸辺もあらんと「事変」の流れに身を任せるの決意堅ければ、二人の事は終るであろうとの思い失わずにいるのである。

巻二の冒頭2章まとめ口述筆記。巻三の下書をなす。

晩餐、禽獣の人群と。禽獣がかくも気取って生意気でかくも愚かめくのはここだけの現象なり。ドイツ人かロシア人か、愚かめくこと遥かにましな仁、中に一人あり。夜、セロ

ン姉妹宅。アメリー愛敬あり。無念なるかな、アメリーが胸薄きこと、痩せて鰊にも似たること！アメリーが人目に見せる部分を見てみれば、とてもひと月後［一緒になっても］女として手の出せる代物に非ず。人目に見せぬ部分や如何に、神のみぞ知り給う！蒸返された話題をめぐりビオンデッタと会話。こちらが立去りたくてじりじりするものだから、かえって相手はそれを弄びだらだらと話を長びかせ面白がっているに違いなし。

葡萄月二日(９月24日月曜日)

仕事、巻二第Ⅲ章まとめ。どう見てもけりがつくのは明日になろう。昼餐、ジェルマニー夫人宅。この同じ卓に座して厚遇款待、客を饗応(もてな)せしジェルマニー氏に思いをいたす者一人としてなし、死して二月にもならず。人間の哀悼愁傷よ、汝、冷ややかにしてその儚くも仮初めのこと、空を往く煙にも似たるかな！オディエ・シェヴリエ[ジュネーヴの銀行家の妻]訪問。欲は戴冠式［ナポレオン、1804年12月２日］に呼ばれたしとの一点に凝縮、控え目な虚栄心は間抜のそれなり。夜、ボワシェール領地［当主アンリ・ボワシェ、文芸学教授］。カトリック教の復活、哲学者プレヴォーの大いに恐れるところなり。読書、クセノフォン。クセノフォン、二流の人間にして、ソクラテス一門が二流人の中では最も高名な一流人に仕上げた者である。就寝時刻をめぐりビオンデッタと喧嘩。相も変らず同じはなし。卓越した素質にはすまないが、縁を切りたいものだ。

葡萄月三日(９月25日)

巻二第Ⅲ章、註と共にまとめる。縮小したが面白しと思う。この章とスカンジナヴィア人の章仕上げたら巻四から巻六まで手掛け、同時に巻四に備えサント-クロワ、巻五に備えベルヒァーを抜書する。

ビィイ[仏駐剳イタリア軍士官、後パリの銀行家]と昼餐。この男、己が何を言い何を考えているのか自分でも分かっていない、いやむしろ思考能力は何処かに置いてきたとでもいうべきか。天がこの男に授けなかったもの、第六感なり。人類の構成分子に思いをいたせば、この男の身に生じたこと［不詳］驚くに当らず。この男を抑圧する相手が人間に非ずば男の宿命は当然と言いたいところだが、奴隷が人間であるように抑圧者も人間であれば、人々は一方を憎む余り他方に過ぎたる同情を寄せるのである。

シュレーゲルの滑稽なる「フランス悲劇論」。シュレーゲル、面妖と単調の奇妙な組合せを内に含む。その考の奇怪なること、狂人のそれに似て、同じ事の繰返は退屈な咄家に似たり。読書、クセノフォン。

葡萄月四日(９月26日)

支払　書簡：タルマ

カランドラン［ジュネーヴの銀行家］宛借金を支払う、139.15フランスリーヴル。午前中かなり病む。背後にあってまるで我らを愚弄するかのごとき目に見えぬ力の類のあること、余が何回となく注目せしことなり。気分すぐれ安楽に過さんとするや、間髪を入れずと言うべきか、きまって不時の故障に見舞われるのである。思えば、今から7年前の第六年実月二十二日［1797年10月13日］のこと、数日間滞在の予定でエリヴォー［1795年に取得した土地、後年買換えたレゼルバージュと同じくパリ近郊リュザルシュ郡に在る］へ向い、身の上を思いめぐらすに充足感あれば、床に就きて独り言ちたり：《お陰さまで今夜は何の邪魔もなく安眠(とき)まちがいなし。》眠りに入って四半刻、家宅捜索に見舞われる。家宅捜索を受ける理由はまったくなかった。総裁政府とは関係良好、警察庁長官とは友人のつもりでいたし、共和国支持の証は一再ならず示してあった。余には無関係な或る事件に連座した人間一人を追う家宅捜索で疚しいことは何ひとつなかったが、せっかくの眠りを邪魔された次第であ

る。就寝時、《お陰さまで何の邪魔もなく安眠できる》と言えばどうなるか思い知らせんとの、復讐の女神ネメシスの差し金とでもいうべきものであった。昨日はすこぶる健勝なれば、気分はこころもち悦に向うも、余は直ちに、「この悦の気分、仕返あって相殺されん」と案じたり。この心配、朝を迎えて案に落ちたり。ネメシスの怒に触れんことを恐れ、口には確と出さなかったが、悦の気分僅かなれば仕返も纔ならんと期待してのことではあった。第Ⅲ章口述筆記。

昼餐、ネッケル夫人［スタール夫人の従妹］。他人を前にした時、相手が自分に寄せる関心しか興味を示さぬ人である。こちらが忘れると、忘れられたといって〈ぷっとふくれたり〉、〈ぎょっとおどろいたり〉見ていてなかなか面白い人間なり。他が自分を措いてよそのことを考える、そんなことは出来るはずがないと納得がいかぬのである。だが、夫人は、その性格、自己中心的なれども気高く、その精神「醗酵過剰」なるも纖細、その顔容、末枯(すがれ)ながら閑麗にして卑しからざれば真の滑稽的人物には非ず。

原稿4章ばかりシモンドを相手に読む。「寓意」の章に曖昧な点あり、他の章は優れた新説ながら論述が弱すぎるものあり。シモンド無学なり、されば余の主張にはシモンドが驚くもの幾つかあり。だが、余の読者の大方もシモンドに劣らず無学なれば、主張を易しくしそれを明白な事実で裏付けること肝要なり。夜は自室にて過す。ビオンデッタ訪れ来る。実に優しく余に愛着す。読書、クセノフォン。発信、タルマ夫人。

葡萄月五日(9月27日)

終日、病軽からず。病をおして仕事をす。スカンディナヴィア宗教の章、未だまともな形を成さずといえども口述筆記。「道徳と宗教の関係」、論述の基調を成すにはとうてい到っていない、従って題目に不足ありとのシモンドの指摘、頷ける点あり。しかし、これ今も余の好む題目なり。全体の執筆、及びまだ必要とする加筆においてこの批判に応えられるのではと思う。

夜、ブラコン、ガルニエと「遊女の喫飯」。これら遊女が知るところの、遊蕩者の奇怪な行動と心理をめぐる異常な事実の仔細。小説ジュスチーヌ［サド、1791年刊］、人間の堕落を誇張せしものに非ず。我ら人間、如何なる種なりや！±。健康の衰え。視力の衰弱。情況の重圧。

葡萄月六日(9月28日)

書簡：父

不快なる健康状態続く。熱っぽい感じ絶えず。来信、父、余の二十九日便に対する返書。この便りの中には愛(アミチエ)も真心も在らずして、父はマリアンヌ［コンスタンの義母］との子供をめぐる金銭上の困難を余に突付けるの覚悟とも見えたり。一日の苦労は一日にて足れり。しかし、労苦を最小にせんと欲すれば己一人を相手に暮す、これに如かず。

仕事、第Ⅱ章スカンディナヴィア宗教、捗らず。書籍の不足、我が身の上の嵐、両者を相手の戦、利あらず。自家に在るよりも十倍の努力を重ねるも、その効の小なること、十分の一にも達せず。読書、クセノフォン。

葡萄月七日(9月29日)

数日前手掛けし全体の草案に幾つか論点をつけ加える。草案の「短所不至(ふし)」再び気になり、加筆修正を望む。ところで、精神と肉体の不調甚だし。昼餐、ドゥオナとラプランシュ宅。余に対する親切、尋常一様のものに非ず。何故、余は「人の悪意」に苦しむこと大にして「人の好意」を喜ぶことかくも小なる。

ビオンデッタと不条理な喧嘩。喧嘩はすまいとあれほど決心した我ではなかったか。糠に釘の決意とはなれり。余の意思力に関係なく、いかなる決断も「鬼の居ぬ間」なればこそ実行できる決断であり、「鬼の居ぬ間」に

非ざればその限りではなし。かくて、かっとなって平常心を失えばあとは感情に一気に押し流されてしまうのである。「悪いのはお前だ」と皆から非難され、乱暴な男だと言われる。そして、二人の人間の間では、一方が激情に流されれば、相手は一層大人しく冷静に構えるというのが常であれば、ビオンデッタの一方勝となるのである。夜、少時アメリー宅。

葡萄月八日(9月30日日曜日)

コペに帰館のため書類を整頓。新草案の下書をなす、この新草案一筋縄ではいかぬが、より完璧をめざせば余が著書は、前編は出たが後編が続かぬといった類の著書には非ずして「完全本」となるはずなり。

昼餐、於ボセ。病、軽からず、気分なかなか不快なり。ビィイの愚言。尊敬する人物に触れて曰く：《あれほどの高位の士[ナポレオン？]は道徳は要求されるべきものにあらず。》コペに帰館。更にひと月[スタール夫人イタリア旅行出発予定]、次に孤独、そして我々は自らのために判断するのだ。自らの強い意志を以てしてビオンデッタと一緒の関係を続けたならば、この関係、優遊不断・移気・激情・矛盾に満ちた余の言動によって生ずる面倒という点では、今よりも余にとっては遥かにましな関係となるのではないか。